

# 倭王武の上表文と五世紀の東アジア情勢

熊谷 公男

はじめに

『宋書』卷九七夷蛮・東夷伝倭国条（以下、『宋書』倭国伝とよぶ）に載せる倭王武の上表文はあまりにも有名である。とくに最初の段落の「東征<sup>二</sup>毛人<sup>一</sup>五十国、西服<sup>二</sup>衆夷<sup>一</sup>六十六国、渡平<sup>二</sup>海北<sup>一</sup>九十五国」の一節は、ひときわなじみ深いものである。ただこれは上表文のなかでは導入部という位置づけであって、全体の基調となっているのは高句麗への強烈な対抗意識であり、そのもっとも端的な表れが父王済以来、高句麗征討を宿願としてきた（以下、「高句麗征討計画」という）という主張であるといっている。

また倭の五王といえ、だれしも朝鮮半島の国名・地域名がずらりと並んだ特異な官爵を思い浮かべよう。たとえば元嘉十五年（四三八）に倭王珍は、「使持節・都督倭・百濟・新羅・任那・秦韓・慕韓六国諸軍事・安東大將軍・倭国王」と自称し、宋朝にその除正を求めたが、認められたのは「安東將軍・倭国王」のみであった。つづく倭王済は元嘉二十年（四四三）の最初の遣使で「安東將軍・倭国王」に叙されるが、つぎの元嘉二十八年（四五二）

の遣使で「使持節・都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事」の称号を加えられる。珍やのちの武の例からみて、おそらくこのときも自称称号には「百濟」が入っていたのであろう。そして倭王武もまた、昇明二年（四七八）に「使持節・都督倭・百濟・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓七国諸軍事・安東大將軍・倭国王」と自称して遣使し、除正を求めるが、またもや「百濟」は除外され、六国諸軍事と「安東大將軍・倭王」に叙された。

問題は、倭の五王がこのような称号を自称し、宋朝へ除正を要求しつづけた意図は何だったのかということである。問題のポイントは二つあると思われる。一つは「都督……諸軍事」に朝鮮半島の多数の国・地域を含めて要求したことの意味であり、もう一つはその中に「百濟」を含めて執拗に要求しつづけたことである。

前者に関していうと、称号に含まれる秦韓と慕韓は、いわゆる三韓の辰韓と馬韓のことであり、その主要地域はすでに統合されてそれぞれ新羅・百濟という国家となっていたが、周辺部には五世紀代にも部分的に小国が残っていた。官爵中の秦韓・慕韓はそのような地域をさすとみられる<sup>①</sup>。また旧著で指摘したように、倭王珍が自称した「任那」も、済の除正称号の「任那・加羅」も加耶諸国全体をさすとみてよく、それに新羅と百濟を加えれば、結

局、高句麗の支配領域以外の朝鮮半島南半部の全域に相当することになる。「都督……諸軍事」とは、坂元義種氏のいうように、「軍権」（諸軍を統率して軍事行動を行うことのできる権限）のおよぶ範囲を意味するので、自称称号のこの部分は、高句麗の支配領域を除いた半島のすべての地域での軍事指揮権の承認を宋朝に求めたということになる。

上表文の基調となっている高句麗への強烈な対抗意識をふまえば、倭王が執拗に半島南半部の軍権の承認を求めたのは高句麗への対抗意識の所産であり、上表文における「高句麗征討計画」も実在のものとするのが理解しやすいであろう。事実、鈴木英夫氏は「高句麗征討計画」は倭王権の命運を賭けた最重要政策だった<sup>4</sup>としている。

しかしながら改めて上表文を検討してみても、倭王以来の悲願とされている「高句麗征討計画」なるものが実在したとは考えがたいと思うようになった。五世紀の倭国をめぐる国際情勢からみても、「高句麗征討計画」を實體視することはできないのではないかとというのが現在の筆者の考えである。本稿はこの点の検討を課題の一つとする。

もう一つの重要な問題は、倭王が「都督……諸軍事」の称号に百済を含めて自称し、その除正をくり返し求めたつづけたことである。先学もこの問題に注目し、多くの議論が行われてきた。倭の五王の代表的な研究者である坂元義種氏は、一地域の軍権が重複して他国の王に与えられることがあるとする（これを「一地域二軍権」とよぶ）立場から、宋が倭王に「都督百済諸軍事」を認

めなかったのは、同じ称号をすでに百済王に認めていたということが直接の原因ではなく、宋がとっていた北魏の封じ込め政策のうえて百済を重視していたことが最大の原因であったとする<sup>5</sup>。近年、石井正敏氏が批判しているように、「一地域二軍権」という見方には確かに問題があるが、宋が倭王に「都督百済諸軍事」を認めなかったのは、やはり宋が北魏封じ込め政策という観点から百済を重視していたことと、そのことを前提に百済王にすでに「都督百済諸軍事」号を授けていたことの二つが重要な理由となっているとみて大過あるまい。

では、それにも関わらず倭王が執拗に「都督百済諸軍事」号を宋に要求しつづけたのはなぜであろうか。筆者は、従来の倭の五王の研究史ではこの点の検討がきわめて不十分であったと思う。この問題に関して坂元氏は、倭王の意図は「百済王の軍権を自己の軍権のなかに包摂し、軍事的支配者として倭・韓両地域に君臨しようとしていた」のであり、その除正を求めたのは、「宋朝の權威によって、その保証を得ようとしたもの」と述べている<sup>7</sup>。筆者にいわせれば、これはきわめて抽象的、観念的な説明であって、倭の五王が現実の国際関係のなかでどのような問題に直面してどのような要求をしつづけたのか、いっこうに明らかでない。

そもそも一般に、倭国と百済は相互に軍事同盟を結んで、友好関係にあった国同士と考えられている。しかしながら「一地域二軍権」が成り立たないとすればなおのこと、倭王が宋朝に「都督百済諸軍事」号を求めるとするのは、百済の国益と真つ向から対立する行為であることをまず想起すべきではなからうか。倭の五

王の時期、倭国があえてこのような外交政策をとりつづけたのは、倭国と百済との間に重要な利害の対立があった可能性も十分に考えられるのである。筆者は、この問題の解明ぬきには、五世紀の倭国をめぐる国際関係を正當に理解することはできないのではないかと考える。この点の解明が本稿のもう一つの重要課題である。

なお近年、西嶋定生氏の「冊封体制論」「東アジア世界論」に代わる枠組みとして「東部ユーラシア」(または「ユーラシア東部」という概念が提示され、新しい歴史像の構築が試みられている<sup>5)</sup>。この新しい枠組みは、とくに中国を中心とした歴史理論である「冊封体制論」への批判としてはかなり有効であることは間違いない。ただし「東部ユーラシア」が中国史ないしアジア史の枠組みとして有効であっても、それが日本史の枠組みとしても同じように有効性を發揮できるとはかぎらないであろう。吐蕃や漠北の遊牧民族国家をぬきに中国史は語れないということはその通りだとしても、それらの地域が日本史の理解にどの程度重要なかは、おのずから問題は別だからである。

「東部ユーラシア」という新しい歴史研究の枠組みが、日本史研究の分野で「東アジア世界論」に取って代わりうるほどの有効性をもつものなのかどうかは、結局のところ、その枠組みを用いた個別の歴史研究の成果いかんにかかっているとみてよい。「東部ユーラシア」という枠組みを用いることで、倭国・日本の歴史をより深く理解できる側面がある、あるいは局面によっては、よりよく説明できるということは確かに認められる。しかしながら「東アジア世界論」に代わる枠組みとして提示しようとするのであれば

ば、この次元ではなお不十分であろう。筆者としては、しばらくこのような立場から「東部ユーラシア」論者の研究成果を見守りたい。

本稿では、倭の五王をめぐる国際関係の考察においては、やはり「東アジア世界」という枠組みが有効であり、なかでも、朝鮮三国相互の関係、およびそれを前提とした三国と倭国との関係がもつとも規定的な要因となっていたことを、五世紀の倭国をめぐる国際関係の考察から具体的に提示したいと思う。

### 一・倭王武上表文の文脈

ここでは改めて倭王武の上表文の文脈をたどりながら、これまで解釈の分かれる点を中心にその内容に検討を加えてみたい。

まず、上表文を含む倭王武の箇所を『宋書』倭国伝から引用しておく(原文は中華書局標点本『宋書』によった。ただし、標点本が『南史』によって文字を改めている二箇所については『宋書』の文字のままとし、本文中でその点にふれた)。

A. 興死、弟武立。自称使持節・都督倭・百済・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓七国諸軍事・安東大將軍・倭国王<sup>1)</sup>。

B. 順帝昇明二年(四七八)、遣使上表曰、

〔第I段〕

封国偏遠、作藩于外。自昔祖禰、躬擐甲冑、跋涉

山川<sup>一</sup>、不<sup>レ</sup>遑<sup>二</sup>寧<sup>三</sup>処<sup>一</sup>。東征<sup>二</sup>毛人<sup>一</sup>五十五国、西服<sup>二</sup>衆夷<sup>一</sup>六十六国、渡平<sup>二</sup>海北<sup>一</sup>九十五国。王道融泰、廓<sup>レ</sup>土遐<sup>レ</sup>畿。累葉朝宗、不<sup>レ</sup>愆<sup>二</sup>于歲<sup>一</sup>。

〔第II段〕

臣雖<sup>二</sup>下愚<sup>一</sup>、忝胤<sup>二</sup>先緒<sup>一</sup>、驅<sup>二</sup>率所<sup>レ</sup>統、歸<sup>二</sup>崇天極<sup>一</sup>。道遙<sup>二</sup>百濟<sup>一</sup>、裝<sup>二</sup>治船舫<sup>一</sup>。而句驪無道、凶欲<sup>二</sup>見吞<sup>一</sup>、掠<sup>二</sup>抄辺隸<sup>一</sup>、虔劉<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>已。每致<sup>二</sup>稽滯<sup>一</sup>、以失<sup>二</sup>良風<sup>一</sup>。雖<sup>レ</sup>曰<sup>レ</sup>進<sup>レ</sup>路、或通或不。

〔第III段〕

臣亡考濟、実忿<sup>二</sup>寇讐壅<sup>一</sup>塞天路、控弦百万、義声感激、方欲<sup>二</sup>大挙<sup>一</sup>、奄喪<sup>二</sup>父兄<sup>一</sup>、使<sup>二</sup>垂成之功、不<sup>レ</sup>獲<sup>二</sup>一簣<sup>一</sup>。居在<sup>二</sup>諒闇<sup>一</sup>、不<sup>レ</sup>動<sup>二</sup>兵甲<sup>一</sup>。是以偃息未<sup>レ</sup>捷。

〔第IV段〕

至<sup>レ</sup>今欲<sup>二</sup>練<sup>レ</sup>甲治<sup>レ</sup>兵、申<sup>二</sup>父兄之志<sup>一</sup>。義士虎賁、文武効<sup>レ</sup>功、白刃交<sup>レ</sup>前、亦所<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>顧。若以<sup>二</sup>帝德覆載<sup>一</sup>、摧<sup>二</sup>此疆敵<sup>一</sup>、克靖<sup>二</sup>方難<sup>一</sup>、無<sup>レ</sup>替<sup>二</sup>前功<sup>一</sup>。窃自假<sup>二</sup>開府儀同三司<sup>一</sup>、其余咸假授、以勸<sup>二</sup>忠節<sup>一</sup>。

C. 詔除<sup>二</sup>武使持節・都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事・安東大將軍・倭王<sup>一</sup>。

倭王武の上表文は、中国古典の表現を駆使した堂々たる六朝期の駢儷体で書かれている。<sup>9)</sup>『魏書』卷一〇〇百濟伝所載の百濟王余慶の上表文などとも類似の表現がみられるところから、近年、

二つの上表文は同一の百濟官人によって起草されたのではないかという説も提起されたが<sup>10)</sup>、上表文には倭王武の強烈な自己主張が横溢していることからしても、やはりそれはいきすぎで、田中史生氏のいうように、高句麗・百濟・倭国の外交文書の起草者が共通の漢文的素養を基盤としていたと理解しておくべきであろう。<sup>11)</sup>

なお本上表文に関しては、かつて湯浅幸孫氏が『冊府元龜』卷九六三外臣部の記載を根拠に、「歸<sup>二</sup>崇天極<sup>一</sup>」以前の前半部は、本来、倭王讚の上表文であって、『宋書』の残欠部分を後に『南史』によって補填したときに紛れ込んでいまのような形になったという説を提唱したことがある<sup>12)</sup>。成立すれば影響するところ大であるが、河内春人・川崎晃両氏がいうように<sup>13)</sup>、『冊府元龜』よりも『南史』や『翰苑』の記述を尊重すべきであり、両書とも現行の『宋書』と同様に、上表文は順帝のときの倭王武のものとしているので、湯浅氏の見解にはしたがいがたい。

上表文の構成は、内容的にみて前掲史料のとおり、第I～IV段に分けられよう。

まず第I段で、武の先祖の倭王たち（祖禰）は自ら先頭に立つて征服戦争に明け暮れ、その結果として「東は毛人を征すること五十五国、西は衆夷を服すること六十六国、渡りて海北を平ぐることに九十五国」という輝かしい戦果をあげました。それによって皇帝陛下の支配は広くゆきわたり、その領土を広げることができました<sup>14)</sup>。また歴代の倭王は宋朝への朝貢を欠かすこともありませんでした、と代々の倭王の宋朝への貢献をアピールする。

かつて西嶋定生氏が指摘したように、この上表文は中国王朝が

天下の中心であることを前提とし、その藩屏たる倭国は、皇帝のために夷狄を防御し、版図を広げ、遣使朝貢を欠かさない義務を負った存在として位置づけられている。<sup>16)</sup>したがって「東は毛人を征すること五十五国、西は衆夷を服すること六十六国、渡りて海北を平ぐること九十五国」というのも、文意としては中国皇帝のために版図を拡大したと述べていることになる。とはいえ、ここにも倭王武の強烈な自己主張が表れていることはいうまでもない。とくに「海北」の九五国を平定したとしているのは、Aの倭王武の自称称号の「都督倭・百濟・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓・七国諸軍事」の部分に対応し、それを裏づけることを意図して語られているとみるべきであろう。

倭王の藩屏としての貢献をアピールしたあと、第II段では、王位を継いだ武は、臣下を率いて天下の中心たる皇帝陛下に帰順するために、はるばる百濟経由で朝貢しようとして船旅の準備をしておりました。ところが、無道な高句麗はいままさに併呑しようとして「辺隸」(＝百濟)を侵略し、人々の殺戮をやめないために、宋朝への朝貢が滞りがちになり、先祖の倭王の「良風」(朝貢を欠かさないこと)が失われてしまいました。朝貢の使者も宋まで通うことができたり、できなかったりというありさまで、と高句麗の妨害のせいで朝貢が滞っていることを弁明する。

要するに第II段の主題は、武が即位して以来、宋朝への朝貢が滞り、藩国としての義務を果たしていないことの弁明なのである。筆者は、このことの確認は、武の朝貢の目的や、ひいては上表文で述べられている「高句麗征討計画」の史実性の理解にもきわめ

て重要な意味をもっていると考えるが、この問題の詳細な検討は次節に譲ることにして、ここではいましばらく文意の正確な把握に努めることにしたい。

「遙」は『南史』(巻七九夷貊・東夷伝・倭国条)では「逕」(通るの意)に作り、この方が文章としては自然なようにも思えるが、「遙」のままでも通じる。いずれにしても倭国が百濟経由で宋に朝貢していたという意味である。問題は「辺隸」という語句である。これが百濟をさすということは、先学のほぼ一致した理解であるが、それが何を基準とした表現なのかということについては、大きく二つの見解が行われている。一つは宋の「辺隸」、もう一つは倭国の「辺隸」とする見解である。

山尾幸久氏<sup>17)</sup>、川崎氏<sup>18)</sup>などは前者の見解をとっている。後者としては、意外な感じを受けるかもしれないが、「わが辺境の隸属国である百濟」と訳しているように西嶋氏がそうであり、福井氏も「わが倭国の辺境たる百濟の地にすむ民草」の意としている。<sup>19)</sup>

筆者は旧著では、西嶋説を継承しつつ、「百濟を「辺隸」というからには、その前提として、倭王の支配の及ぶ小世界が想定され、百濟はその辺境に位置していると認識されていた<sup>21)</sup>」と考えた。その後、金子修一氏の教示を得て、同書の学術文庫版では、宋の「辺隸」説に改めている。<sup>22)</sup>いまこの問題を改めて考えてみると、倭王珍や倭王武が自称した称号の「都督……諸軍事」号に百濟を含む朝鮮半島南部の国・地域を連ねているのは、倭の五王が、倭国を中心として百濟を含む朝鮮半島南部まで広がる一つの小世界を構想していたことを示すものと解されるし、上表文で「東、

征<sup>三</sup>毛人<sup>一</sup>五十国、西服<sup>二</sup>衆夷<sup>一</sup>六十六国、渡平<sup>三</sup>海北<sup>一</sup>九十五国」と述べていることも同様の観念を前提とした表現とみてよい。また西嶋氏が指摘したように、当時、倭国内では「治天下大王」という君主号がすでに用いられていて、大王を中心とした天下的世界が明確に構想されていたことも確認できる。したがってやはり、倭国は百済を倭国的天下の「辺隸」と認識していたと解してさしつかえないのではなからうか。そこでいま一度、旧著の「上表文で倭王武は、皇帝の支配する天下を認め、そこへ参入しながら、一方で、皇帝の天下から相対的に独立した、自己を中心とした小世界を構想し、それを自称称号の都督諸軍事の管轄範囲という形で表現しようとした」という見解に立ち返りたいとおもう。

なお、すでに指摘されていることであるが、「句驪無道、凶欲<sup>二</sup>見吞<sup>一</sup>、掠<sup>三</sup>抄辺隸<sup>一</sup>、虔劉不<sup>レ</sup>已」というのは、四七五年に百済の王都漢城が高句麗軍に攻め落とされる前後の状況をさしているとみられる。後文で取り上げる、百済王余慶（蓋鹵王）が延興二年（四七二）に北魏へ提出した上表文では、高句麗の百済に対する猛攻が三〇余年にもおよんでいることが語られていることにも通じよう。

ここでもう一つ確認しておかなければならないことがある。それは、倭王が朝貢を欠くようになったのはいつごろからかという問題である。第Ⅱ段は、冒頭に武が王位を継いだことが記されているので、「每致<sup>三</sup>稽滯<sup>一</sup>、以失<sup>二</sup>良風<sup>一</sup>」ことになったのも、武の代になってからのことと解されよう。ところが、その直後に「雖<sup>レ</sup>曰<sup>レ</sup>進<sup>レ</sup>路、或通或不」とあるので、武が宋まで通交できたこと

があつたようにも受け取れる。この辺の文意にあいまいさが残るのである。

つぎの第Ⅲ段をみると、父王の済が、高句麗が宋朝への路を塞いでいることに怒って高句麗征討を企図したという話が出てくるので、高句麗による朝貢の妨害はすでに済のときにはあつたことになる。また第Ⅱ段の主題が、先述のように、武がこれまで朝貢の礼を欠いてきたことの弁明とみられるので、これらをふまえて総合的に判断すれば、武はこのときまで朝貢したことがなかったが、高句麗の「無道」は済のときからはじまっていたのであり、「或通或不」という語句は済や兄王の興の治世も含めて述べたことと解されよう。なおこのような理解には、『宋書』順帝紀昇明元年（四七七）十一月の倭国の遣使記事が障害となるが、これについては次節で取り上げることにしたい。

第Ⅲ段では、亡き父王の済は、仇敵の高句麗が宋朝への路を塞いでいることに怒り、百万の兵士も正義の声を上げて戦意高揚し、まさに大挙して出陣しようとしていたやさきに、父と兄が相ついで亡くなってしまい、あと一步のところまで征討を実行することができませんでした。その後、武も服喪のために出兵を取りやめ、いまだに高句麗に勝利をあげることができません。ということです。

ここでの主題は、父王済以来、高句麗征討を宿願としてきたということである。ただそれと同時に見過ごせないのは、済・興・武と高句麗征討を念願してきたにもかかわらず、先王の相次ぐ死去とその服喪のために、いまだに征討を実行に移せないでいると

弁明していることである。この弁明に何か不自然なものを感じるのは筆者だけであろうか。

第Ⅱ段では朝貢が滞っているのは無道の高句麗のせいだと弁明し、そこで第Ⅲ段で高句麗征討を大義として掲げるわけであるが、それも先王の相つぐ死と服喪のために行動を起こせないでいるというのである。有り体にいえば、武は朝貢の礼を欠いてきたことを高句麗のせいにし、だからその高句麗を討つことは宋朝への忠誠を尽くすための義戦なのだといながら、それすらいまだに実行していないということなのである。堂々たる駢儷体の文章に比して、何とも空疎な内容ではなからうか。筆者は、ここで武が高句麗の無道を強調し、その征討を悲願として掲げながら、それを三代にもわたって実行していないということに、どうしても不自然さを感じる。そこで次節でその史実性を検討してみたい。

そして最後の第Ⅳ段では、喪が開けたいま、武備を整えて父兄の遺志を継ぎ、決死の覚悟で高句麗征討を行いたいと思えます。そこでもし皇帝の恩恵に浴して、強敵高句麗を打ち砕き、わが国の困難な状況を克服することができた暁には、先王の皇帝に対する貢献を引き継いで忠誠を尽くしたいと思えますと、いよいよ高句麗征討を実施するときがきたことを高らかに宣言する。このなかの「帝徳覆載」とは、皇帝の徳がひろく万物を覆うことであるが、ここは、福井氏が「覆載」を「めぐみ」と訳しているように<sup>(24)</sup>、皇帝の恩恵のことで、具体的にはこの後に述べられている官爵の授与をさすとみるのがよいであろう。

これにつづく上表文末尾の「窃自仮<sup>25</sup>開府儀同三司」、其余咸

仮授、以勸<sup>26</sup>忠節」の一文は、結びの句になつていながらもかわらず、すこぶる難解で、先学の解釈も大きく分かれている。最大の問題は、「其余」が何をさしているのか不明確なことであるが、そもそもこの文が官爵の授与を要請したもののなかどうかについても異論があるので、検討してみたい。なお『南史』にはこの部分に「其余咸各仮授」と「各」字があるが、文意は基本的に変わらない。

まず「其余」に関しては、坂元氏はじめ、武の臣下の官爵をさすとする見解が多数を占めている。坂元氏はこの一文を、「私(倭王武)は、とりあえず自分に、自分で、開府儀同三司の官爵を授けましたが、なにとぞ正式に授爵をお願いします。また、私以外の部下たちにも皆、とりあえず私から、それぞれ官爵を授けておきましたので、彼等にも正式の任官をおねがいします。こうすることによって、彼等の忠節を勧めたいと思えます」というほどの意味ではあるまいか(傍線―引用者)と意識している。<sup>(25)</sup>原文と対照すれば明らかのように、傍線部は坂元氏が補った部分である。福井氏も、「私はひそかに自分を開府儀同三司に擬しており、私が、私の臣僚の者にもみな官爵をお授けいただき、わが国のいっそうの忠節を督励していただきたく存じます」と訳している。<sup>(26)</sup>また、最近では廣瀬憲雄氏が「其余」は「明らかに倭国国内の臣下への除正を指している」とする。<sup>(27)</sup>

それに対して開府儀同三司以外の武自身の官爵とみる説もある。西嶋氏は「ひそかに自ら開府儀同三司の位を仮称しており、すが、その他の官号もそれぞれ仮授していただきたく、それによつ

て私の忠誠を激励していただきたく存じます」と訳している。<sup>(28)</sup>西嶋氏の訳文には「西嶋試訳」と付記があるように、やはり「いただきたく」の箇所は意訳とみられる。またのちにとりあげるように、「仮授」は皇帝の正式な「除正」に対する用語なので、その点でこの訳には疑問がある。また鈴木英夫氏も、「開府儀同三司」は武が朝貢時に宋に自称した称号の一部であるから、「其余」は「開府儀同三司」以外の称号を指すと理解するのが無理がないとしている。<sup>(29)</sup>

なお福井氏は、既述のように前説をとるが、「開府儀同三司以外の官爵」の解釈も可能」としており、川崎氏も、両様の解釈が可能だとする。<sup>(30)</sup>

一方、山尾幸久氏は、末尾の一文を「私は自分で開府儀同三司を仮りている。またその他部下への官爵もみな仮に授け、皇帝陛下への部下の忠節のはげましとしている」と解釈して前説をとるが、「ここには除正の要求をうかがうことができない」から、このとき武は「宋の天子の除正を要請してはいない」とする。では、武の遣使の目的は何だったのかというと、「要するに宋が出兵し百済のために高句麗を討伐することを要請したものであった」と主張する。<sup>(31)</sup>

以上、先行学説を三つに分けて紹介してきたが、もっとも妥当なのはどの説であろうか。以下、順次検討していきたいが、まず最初に山尾氏の見解を取り上げよう。山尾氏が、武は官爵の「除正を要請してはいない」と解しているのは、現在、われわれがみることのできる上表文の解釈としてはもっとも正確であろう。た

だそうになると、上表文は肝心な結びの文のない、尻切れトンボの文書ということになってしまふのである。

実は、『宋書』所載の上表文には原文が節略された徴証が複数箇所に見受けられる。まず上表文には、本来であれば必ず記される「臣某言……」などの書出、それにつづく「伏惟……」などの発話、さらには「誠惶誠恐、頓首頓首、死罪死罪」などの書止の文言がいずれもないので、首尾が省略されていることが明らかである。さらに本文中にも節略があったと考えないと理解しがたい箇所が見出される。それが問題の末尾の一文である。そもそも「其余」が何をさすかをめぐって異なる見解が対立しているのは、上表文中にそれに相当する官爵が一切書かれていないからであるが、それは『宋書』収録時にその箇所が節略されたためと考えるほかない。

前掲史料Aに武が「使持節・都督倭・百濟・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓七国諸軍事・安東大將軍・倭国王」という称号を自称したことが記されているが、この記載は何によったのであろうか。『宋書』順帝本紀には、前年の昇明元年に倭国が使者を派遣して方物を献じたという記事があるので、翌二年の遣使が倭王武の最初のものなのかどうかをめぐって議論があるが、次節で取り上げるように、筆者は上表文の内容からみても、『宋書』倭国伝所載の遣使を武の最初の遣使とみてさしつかえないと考える。そうすると、それ以前に倭王武の自称称号の情報が宋側に伝えられたとは考えにくく、この自称称号はもともと上表文中に記されていたものを地の文に抜き出したとみるのが自然であろう。それで上表



文からは自称称号の部分が省略されてしまったのである。このように上表文に節略箇所が少なくなく、かつ末尾の形式がおかしいとすれば、『宋書』に上表文を収録する際に、自称称号の除正を要請した箇所が何故か削除されてしまったという想定も十分に可能ではないかと思われる。

では、山尾氏の想定のように、この上表文を宋朝に高句麗征討を要請したものととらえることができるかという点と、それは困難であろう。『魏書』卷一〇〇百濟伝には延興二年(四七二)に百濟王余慶(蓋鹵王)が北魏に救援要請をした上表文が載せられているが、そこでは「速遣<sup>一</sup>一将<sup>一</sup>、来救<sup>二</sup>臣国<sup>一</sup>」などと、端的に救援軍の派遣を要請している。軍隊の派遣要請のような緊要な用件であれば、このように単刀直入に用件を記すのが当然であろう。ところが武の上表文には、救援軍の派遣を明示した箇所は見当たらず、それを目的としていたとは考えがたい。

上表文が叙爵の要請を最大の目的としていたということは、上表文の前後の文脈からも裏づけられると思われる。Aで興の後を継いだ武の自称称号を記し、つづくBに武の上表文が載せられ、しかもその最後の第IV段で再び武の自称称号と「其余」の「仮授」称号に言及し、さらにCに上表文に答えた順帝の詔を掲げるが、その内容は武に除正した官爵に関することだけであって、救援軍に関する事などにはいっさいふれていないのである。山尾氏のように武の上表文を理解すると、前後のA・Cとまったく内容がつながらなくなるばかりでなく、武は最初の遣使なのに官爵を要求せず、なおかつ要求してもいない官爵を授かったことになって

しまう。これはきわめて不自然なことといわざるをえない。以上の諸点から山尾氏の見解にしたがうことはできない。

つぎに「其余」を臣下の官爵をさすとする説を検討したい。この説の最大の難点は、B上表文にも、C順帝の詔にも、武の臣下の官爵についての言及が一切ないことである。すなわち、文脈から「其余」が何をさしているかを判断しようとするかぎり、これを臣下の官爵とする理解は生じえないのである。それにもかかわらず、これまで多くの先学がこれを臣下の官爵のこととみてきたのは、大きく二つの理由がある。一つは、これ以前に倭王が臣下の官爵の除正を宋朝に要求したことがあることであり、もう一つは、「其余咸仮授」の「仮授」という語句に、中国王朝の除正を前提に、王が臣下に官爵を授けるという意味があることである。前者の具体例をあげると、元嘉十五年(四三八)、宋に朝貢した倭王珍は自称称号のほかに臣下の倭隋ら一三人の將軍号の除正を求め、認められている。さらに元嘉二十八年(四五二)に倭王済が遣使したときにも、済が昇除されるとともに、済が要請した臣下二三人が將軍・郡太守に除正されている。だから武のときにも臣下の官爵を要求してもおかしくないと考えるのであるが、これはあくまで傍証程度にしかかなりえないであろう。

そこで問題は、「仮授」という語は「王が臣下に官爵を授ける」という意味にしか解釈できないのか、という点にしばられる。この「仮授」については、坂元義種氏に詳細な研究があるので、それを参照しながらその点を検討してみよう。『宋書』『南齊書』によれば、百濟王はしばしば臣下を、「行〇〇將軍・〇〇王・(侯)

とか、「行〇〇將軍・〇〇太守」に任じて、南朝に除正を求めた。そして除正を受けたときに「行」がとれて、真正の「〇〇將軍」とか「〇〇太守」になる。その場合、百済王が臣下を「行〇〇將軍」などに任じることを「行職に仮す」といい、それを「仮授」ともいったのである。したがってこの点からみれば、「仮授」とは「王が（中国王朝から除正されることを前提に）臣下に官爵を授ける」ことであり、したがって坂元氏は、上表文の「其余咸仮授」を、武が臣下に官爵を授けたという意味に解したのである。

しかしながら、はたして「仮授」の意味をこれだけに限定してしまっていないのであろうか。筆者はそうは考えない。それは、坂元氏に取り上げている事例であるが、百済王の自称称号を「行……百済王」と記すことが知られるからである。すなわち、『梁書』卷五四諸夷・東夷伝百済条に載せる普通二年（五二二）の高祖の詔には「行都督百済諸軍事・鎮東大將軍・百済王餘隆、守三藩海外<sup>一</sup>、遠脩<sup>二</sup>貢職<sup>一</sup>、迺誠款到、朕有<sup>レ</sup>嘉焉。宜<sup>下</sup>率<sup>二</sup>旧章<sup>一</sup>、授<sup>中</sup>茲<sup>上</sup>。可<sup>二</sup>使持節・都督百済諸軍事・寧東大將軍・百済王<sup>一</sup>」とあり、百済王の自称称号に「行」字が冠され、梁朝がそれを除正している。したがって百済王は自らを「都督百済諸軍事・鎮東大將軍・百済王」という行職に仮していたことになる。坂元氏自身が論じているように、「行職に仮す」とは「仮授」のことにほかならないから、「仮授」は「臣下に官爵を授ける」意に限定する必要はなくなり、坂元氏らの通説は最大の根拠を失うことになる。

要するに「仮授」とは、中国王朝による除正を前提にした用語

で、王が官爵を自称することと、臣下に官爵を授けることの両様の用法があったと解されるのである。こう考えれば、問題の「窃自仮<sup>二</sup>開府儀同三司<sup>一</sup>、其余咸仮授、以勸<sup>二</sup>忠節<sup>一</sup>」の意味はきわめて明瞭となる。すなわち「ひそかに自ら開府儀同三司を名取り、そのほかの官爵もみな自称して、忠節に励んできました」という意味である。既述のように、もともと上表文には、冒頭に近いうところに武の自称称号が記されていたとみられるので、「其余」とはそれを指したものと解される。この文章自体は、その自称称号の除正を直接要請したものではないが、この直後に要請をした結びの一文があったと推定してさしつかえないことはすでに述べたとおりである。

上表文は武自身の官爵の除正を要請したもので、臣下の官爵の除正要請は含まれていなかったと考えることではじめて、『宋書』倭国伝で武の上表文が、武の自称称号を記したAと、順帝の除正の詔であるCの間に掲げられていることの意味が十全に理解できるであろう。武の官爵の除正要請に臣下の官爵が含まれていなかったということは、後述の倭の五王が代替わりごとに遣使して冊封を受けていたわけではなかったという事実と相まって、鈴木靖民氏が提唱した「府官制」<sup>33</sup>のように倭王権内部の政治的編成にも冊封が重要な意味をもったという見方に見なおしをせまるものであろう。

Cの除正された官爵をA・Bの自称称号とくらべると、都督諸軍事号から百済が省かれたことと、開府儀同三司が認められなかった点が異なる。坂元氏の指摘によれば、<sup>34</sup>宋朝で開府儀同三司

を授与された諸国王はわずか四名で、東夷では高句麗王高璉（長寿王）が大明七年（四六三）に授与されたのみであったという。倭王武が開府儀同三司を要求したのは、これまでも指摘されているように、高句麗への対抗心から出たこととみて誤りあるまい。

## 二・倭の五王の遣使と「高句麗征討計画」の史実性

本節では、前節での倭王武の上表文の検討を受けて、倭の五王の遣使の推移をたどりながら、「高句麗征討計画」の史実性について考察してみたい。

倭の五王の中国王朝への遣使の推移については、関係年表を参照されたい。遣使の始期と終期についてはそれぞれ議論があるので、はじめに簡単にふれておく。まず東晋の義熙九年（四一三）の遣使については、『太平御覧』巻九八一香部一・麝条所引の『義熙起居注』の「倭国、献貂皮・人参等」という記述をめぐってさまざまな議論があったが、これは石井正敏氏が指摘したように、『太平御覧』が高句麗の遣使を誤引したものとみるのがよく、<sup>(35)</sup>倭王讚による単独遣使とみなすのが妥当であろう。<sup>(36)</sup>

一方、終期については、通説では建元元年（四七九）の南斉および天監元年（五〇二）の梁による倭王武への叙爵を、新王朝樹立を祝う一方的な進号と解して、昇明二年の倭王武の遣使・叙爵を最後の遣使とみてきた。ところが近年、『梁職貢図』の新出の模本によって倭国使の題記のなかに「齊建元中、奉表貢献」の一文があったことが判明し、これを『南斉書』巻五八東南夷伝・

倭の五王関係年表

413	倭王、晋に朝貢する。（『晋書』安帝紀、『南史』倭国伝、『梁書』倭伝）
421	倭王讚、宋に朝貢し、授爵される。（『宋書』倭国伝）
425	倭王讚、司馬曹達を宋に遣わし、国書と方物を献ず。（『宋書』倭国伝）
430	倭国王、宋に朝貢する。（『宋書』文帝紀）
438	讚死して弟珍立つ。宋に朝貢し、自ら使持節、都督倭・百濟・新羅・任那・秦韓・慕韓六国諸軍事・安東大將軍・倭国王と称し、その除正を求む。文帝、安東將軍・倭国王に叙される。珍また倭隋等13人に平西・征虜・冠軍・輔国の將軍号の除正を求め、認められる。（『宋書』倭国伝） 倭国王済、宋に朝貢し、安東將軍・倭国王に叙される。（『宋書』倭国伝）
443	倭国王済、使持節、都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事の称号を加えられ、安東大將軍に進号する。また倭王の臣下23人に將軍・郡太守号の授与を求め、認められる。（『宋書』文帝紀・倭国伝）
451	※文帝紀には「安東將軍倭王倭済、号を安東大將軍に進む」とあるが、倭国伝では「安東將軍故の如し」とあって矛盾する。倭国伝に誤脱あり（石井正敏説）。
460	倭国、宋に朝貢する。（『宋書』孝武帝紀）
462	済死し、世子興、宋に朝貢し、安東將軍・倭国王に叙される。（『宋書』倭国伝）
477	倭国、宋に遣使して方物を献ず。（『宋書』順帝紀） ※翌年の倭王武の上表・除正と同一の遣使で、その入朝記事（廣瀬憲雄説）。
478	興死して弟武立つ。武、宋に遣使して上表し、自ら使持節、都督倭・百濟・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓七国諸軍事、安東大將軍・倭国王と称して除正を求め、使持節、都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事、安東大將軍・倭王に叙される。（『宋書』順帝紀・倭国伝）
479	齊の高帝、新たに除した使持節、都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓六国諸軍事、安東大將軍・倭王武の号を進めて鎮東大將軍と為す。（『南斉書』倭国伝）
502	梁の武帝、鎮東大將軍倭王武の号を征東大將軍に進める。（『梁書』武帝紀）

倭国条の「建元元年、進<sub>二</sub>新除使持節・都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓六国諸軍事・安東大將軍・倭王武<sub>一</sub>」、号為<sub>二</sub>鎮東大將軍<sub>一</sub>」の記事に相当するとみて、南斉の成立直後にも倭国が使者を派遣していた可能性があるとする説がとえられた<sup>(37)</sup>。しかしながら『南斉書』の記載は、明らかに進号の形式をとっており、しかも建元元年は倭王武の宋朝への遣使の翌年にあたっているが、後にふれるように昇明元年(四七七)の例が独立した遣使でないとするれば、倭の五王に連年遣使の例はない。そのうえ坂元氏が指摘しているように、建元元年には河南王・宕昌王・羌王らも進号している<sup>(38)</sup>。したがって南斉建国の際にも祝賀的な叙爵が広く行われたことは明らかであり、『南斉書』の記事を一方的な進号とみる説は簡単に否定できないと考える。

さてそうすると、倭の五王の遣使は通説どおり東晋・義熙九年(四一三)から宋・昇明二年(四七八)の間ということになる。ただしこのうち義熙九年の東晋への遣使は、『晋書』巻一〇安帝本紀をはじめ『南史』巻七九夷貊下・東夷伝・倭国条、および『梁書』巻五四諸夷伝・倭条でも叙爵にはふれていない。しかも永初元年(四二〇)の宋朝樹立時には高句麗王・百濟王を進号しているのに、『宋書』巻三武帝本紀下、巻九七夷蛮伝・高句麗条、倭王の進号はみられない。これは前王朝で叙爵されていたとすればきわめて不自然であろう。そこで義熙九年には倭王の遣使はあったが、叙爵はなかったとみておきたい。そうするとつぎに倭王の遣使が確認できるのが宋・永初二年(四二一)の倭王讚で、このときは叙爵されている。そこで倭の五王が遣使して叙爵、すなわ

ち冊封されたのは南朝宋の四二一〜四七八年の間にかぎられることになる。倭の五王の遣使目的を考える際には、この年代をふまえる必要がある。

つぎに上表文第Ⅲ段に出てくる「高句麗征討計画」の史実性について検討してみたい。坂元氏は、この「高句麗征討計画」について、「高句麗討つべし、援兵を請う、これが武の本音だったのではないか。実力で高句麗を打破できぬ以上、倭もまた中国王朝にすがらざるをえなかった」と述べている<sup>(39)</sup>。ややあいまいな表現ではあるが、武は高句麗征討の必要性を感じていたものの、自ら実行しようと考えていたわけではなく、宋に援兵を派遣してほしいと願っていたということであろうか。一方、鈴木英夫氏は、この時期、高句麗の軍事的影響が金官加耶地域にまで達していたことは否定しがたく、高句麗は倭王権にとっては現実的な脅威となっていたとし、『高句麗征討計画』は倭王権の命運を賭けた最重要政策だった<sup>(40)</sup>とする。また別な論文では「武の「高句麗征討計画」は高句麗の南下に危機感をもった済以来の倭王の切実な軍事外交政策であり、宋への忠誠を強調することを目的とした単なる「方便」ではなかった<sup>(41)</sup>」ともいっていて、「高句麗征討計画」の現実性を強調した見解を示している。

しかしながら筆者は、まず上表文の内容自体から、じつさいに「高句麗征討計画」なるものが存在したかは、きわめて疑わしいと考える。つぎにそのことを論じてみたい。

上表文第Ⅲ段によれば、武の父済は、「寇讐」すなわち高句麗が宋朝への朝貢の路を塞いでいることに怒って、高句麗を征討し

ようとしたが、そのやさきに父の済と、そのあとを継いだ兄の興が相ついで亡くなってしまい、あと一步のところまで征討を実行することができなかつたという。さらにその後即位した武も、服喪のために出兵できず、いまにいたつていっているというのである。

筆者は、先述のように、この弁明に言い訳がましい不自然さを感じるので、事実としておかしい点がないかどうか、検証してみることにはしたい。

上表文の「高句麗征討計画」の史実性を検証するうえで重要なポイントは二つあると思われる。一つは、父王の済が高句麗征討を計画して実行に移そうとしたところ、済と兄の興が立て続けに亡くなったために征討を実行できなくなったということであり、もう一つがそのあとを継いだ武も、喪に服していたために軍隊を出勤できずに今日にいたつたということである。

これらのことが事実かどうかを検証するうえで、まず確認しておかなければならないのが、『宋書』本紀にみえる昇明元年（四七七）の遣使記事である。すなわち『宋書』卷一〇順帝本紀昇明元年十一月己酉条には「倭国遣<sub>レ</sub>使献<sub>二</sub>方物<sub>一</sub>」と、倭国の遣使記事がある。同紀には翌昇明二年五月戊午条にも、「倭国王武遣<sub>レ</sub>使献<sub>二</sub>方物<sub>一</sub>。以<sub>レ</sub>武為<sub>二</sub>安東大將軍<sub>一</sub>」という記事がみえ、こちらは倭国伝の倭王武の遣使上表の記事（B）に対応していることが明らかなので、昇明元年紀の記事をどう考えるかが問題となるのである。

従来、この記事に関しては、興の二度目の遣使とみる坂元氏の<sup>44)</sup>説や、武の一度目の遣使とみる山尾氏の見解などがあつた。<sup>45)</sup>しか

し前者では、済と興が相ついで亡くなったとする上表文の記述と矛盾するし、後者をとると、こんどは昇明二年の武の朝貢が、上表文で朝貢が滞っていたことを弁明していることや叙爵されていることから、最初の遣使とみられることと矛盾してしまう。そのようなことから、鈴木氏は元年の記事を二年の重複記事とみなし、<sup>44)</sup>廣瀬氏は元年を入朝記事、二年を除正記事と解した。<sup>45)</sup>いずれも『宋書』倭国伝の倭王武の遣使・上表を、武の最初の遣使と考える点で共通しているが、廣瀬氏の見解がより妥当性が高いと思われる。筆者もこの説を支持したい。

この点をふまえて、上表文の「高句麗征討計画」の史実性について検討を進めたい。まず済が高句麗征討を企図したが、済と興が相ついで亡くなったために征討ができなくなったとする点であるが、済は元嘉二十年（四四三）と同二十八年（四五二）に宋に遣使しており、『宋書』卷六孝武帝本紀大明四年（四六〇）十二月丁未条に「倭国遣<sub>レ</sub>使献<sub>二</sub>方物<sub>一</sub>」とみえる遣使も、つぎの世子興の遣使記事の存在から済のものともみてよいであろう。一方、興は、『宋書』倭国伝に「世祖大明六年、詔曰、『倭王世子興、奕世載忠、作<sub>二</sub>藩外海<sub>一</sub>、稟<sub>二</sub>化寧境<sub>一</sub>、恭修<sub>二</sub>貢職<sub>一</sub>。新嗣<sub>二</sub>辺業<sub>一</sub>。宜<sub>レ</sub>授<sub>二</sub>爵号<sub>一</sub>、可<sub>二</sub>安東將軍・倭国王<sub>一</sub>』」とみえ、大明六年（四六二）に世子として朝貢し叙爵されている。したがってこのときが興の初回の遣使とみてよい。そうすると、済が亡くなったのは大明四〇六年ということになり、父・兄が相ついで亡くなったということが事実とすれば、興は大明六年から数年のうちに亡くなったことになろう。ちなみに通説で興に比定される安康天皇は、『日本書紀』

では治世三年とされている。

このように、上表文が済と興が相ついで亡くなったとする点は、四六二年前後の出来事とみれば『宋書』の遣使記事や『日本書紀』の安康の治世とも大きな齟齬はない。では、武が喪に服していたために高句麗征討を実行できないできたとしている点はどうであろうか。この部分は、上表文の原文では「居在<sup>レ</sup>諒闇、不<sup>レ</sup>動<sup>レ</sup>兵甲」。是以偃息未<sup>レ</sup>捷」となっている。「居在」は、「どちらか一字でいいのを、四字句にするために二字にひきのばしたもの」であるという。<sup>46</sup>「諒闇」は天子が先帝の喪に服することであるから、文意としては「先帝の喪に服し、軍隊を出動させることを控えてきたために、軍隊を動かすことはせず、いまだに高句麗に勝利をあげていない」ということなろう。そしてつぎの「至<sup>レ</sup>今欲<sup>三</sup>練<sup>レ</sup>甲治<sup>レ</sup>兵、申<sup>二</sup>父兄之志<sup>一</sup>」という文は、いまこそ武備を整え、父兄以来の宿願をはたしたい（「申」は「伸」と音通）という意味であるから、「至<sup>レ</sup>今」というのは、「喪が明けたいま」という意味に解さざるをえない。

ところが昇明元年（四七七）に入朝した倭国使が武の最初の遣使だとすると、先王の興が亡くなってからすでに十数年がたっている。これは、服喪期間としてはどう考えても長すぎよう。しかも服喪を理由に、父兄以来の宿願であるという高句麗征討を十年以上にわたって先送りしてきたことになってしまうのである。

周知のように、奈良・平安時代には、一周忌をただ「周忌」とよび、それ以降の年忌は一切行わなかった。ちなみに服喪による軍事行動の延期では、斉明天皇の死去にともなう百済救援の延期

がよく知られているが、斉明天皇が亡くなったのが六六一年七月、中大兄皇子が服喪後に百済救援軍を派遣したのが六六三年三月なので、その間二年足らずである。時期が違うとはいえ、十数年の長きにわたって服喪を理由に重要な軍事行動を延期するようなことは、およそ考えがたいといってよい。

要するに、上表文で先王の相つぐ死と服喪のために軍隊を出動できずにきたと述べていることは、文字通り事実とは受け取れないのである。筆者は、このことは高句麗征討を父王済以来の悲願として強調していること自体をも疑わせるものであると思う。少なくとも、「高句麗征討計画」が実在したものなのかどうかは、検証を要するのである。

この問題に関連して、もう一つふれておきたいことがある。それは、倭王武が即位後十年以上経ってからはじめて宋に遣使したとみられることである。廣瀬氏は昇明元年の遣使が武の代替わり遣使ではないことを指摘し、そのことが重要な意味をもつことに注意を喚起している。すなわちこのことは、倭王武が即位後一〇年以上もの間、宋の冊封を受けていないことを意味し、「倭王武の政権は通常の被冊封国とは異なる位置付けにあ」ったことになるといっているのである。これが被冊封国として異例だったことは、武が上表文の第II段で、朝貢が滞っていたのは高句麗が朝貢路をふさいでいるからだと弁明していることから裏づけられよう。

したがって武が昇明元年になってはじめて宋に遣使したのは、倭国側の主体的な動きによるものであったとみなければならぬ。そこで想起されるのは、これまでも指摘されているように、

蓋鹵王二十一年（四七五）に起こった百済の王都漢城が高句麗の攻撃によって陥落した事件である。倭王武の最初の遣使がこのわずか二年後なので、両者に何らかの関連があることは否定できないであろう。上表文中でも、第II段で「句驪無道、凶欲見吞、掠抄辺隸、虔劉不巳」といつているのは、この事件を指しているようにも思われる。

しかしながら、この一節の意味を改めて上表文の文脈に即して考えてみると、必ずしも蓋鹵王二十一年の事件に直結させることはできないと思われる。というのは、つづく第III段で「寇讐」（高句麗）が「天路」（朝貢路）を塞いでいるのは父王済のときからであると語られているからである。既述のように、済がはじめて宋に遣使したのは元嘉二十年（四四三）のことなので、武の遣使よりも三〇年以上も前のことになる。すなわち、少なくとも上表文の文脈からみると、「句驪無道、凶欲見吞、掠抄辺隸、虔劉不巳」を四七五年の漢城陥落に限定することはできないのである。また第IV段で、「至今欲練甲治兵、申父兄之志」と、いまこそ挙兵のときだといっているのも、既述のように、文脈上は喪が明けたことが理由となつているとしか読めず、漢城陥落を理由にしているわけではない。

このように上表文では、意外にも漢城陥落のことに直接言及しているところはないといつてよいのである。第IV段で、いまこそ父兄の遺志をついで兵を挙げるときがきたと語っていることも、むしろそのあとの「帝徳覆載」、すなわち皇帝の恩恵に浴して開府儀同三司を含む高句麗並みの官爵を授与されるべき理由として

の位置づけに力点があることは、これまでも指摘されている通りである。

このように文脈をたどつてくると、上表文からは、百済の都漢城が高句麗に攻め落とされたことに危機感を募らせて、倭国が百済救援を行おうとしているので宋朝もぜひ加勢してほしい、というような切迫感を感じられない。上表文の文脈は、あくまで宋への朝貢路を塞いでいる無道な高句麗を討つときがきたので、その成功のために高句麗並みの官爵を授与してほしいという、藩屏としての立場を前面に押し出した原則論による官爵の要求に終始しているといつてよい。この点も「高句麗征討計画」の史実性に疑問をもたせる理由の一つである。

かつて広開土王代に倭国軍が高句麗軍と戦火を交えたことは、広開土王碑に明記されており、疑問の余地はない。しかしながらそれは、次節で述べるように、倭国の単独行動ではなく、当時の加耶諸国や百済との関係にもとづいた出兵と考えられる。ところが、倭の五王の時代には東アジア世界の国際関係が大きく転換する、と筆者は考えている。具体的には、百済と新羅が急速に接近し、それにもなつて百済と倭国の関係は逆に乖離の方向に向かうことによつて、東アジアに広開土王代とは大きく異なつた国際関係が形成されると考えられるのである。現在の古代史学界ではこの点の認識がほとんどないため、漠然と倭の五王の時代も高句麗との軍事衝突が起こりうる状況が続いていたと考えられているように感じられる。そこで次節ではこの問題を取り上げ、倭の五王の時代には「高句麗征討計画」がもはや現実性をもちえなくなつ

ていたことを示したいと思う。

### 三・倭の五王をめぐる東アジア情勢

#### (一)

倭国が高句麗と直接戦った広開土王代は、新羅はいまだ弱小国で、高句麗に軍事的に従属することで国土の防衛を図るといふ戦略をとった。一方の百済は、加耶諸国を介して倭国と同盟をむすび、高句麗と対決する道を選んだ。ここに百済―加耶南部諸国―倭国と高句麗―新羅といふ二つの勢力が対立する構図が生まれるのである。<sup>48</sup>

広開土王碑にみえる永樂十年(四〇〇)と同十四年(四〇四)の二度にわたる倭と高句麗の戦闘は、このような両陣営の対立のなかで起こったものであった。すなわち広開土王碑によれば、永樂九年に「倭人滿<sub>二</sub>其(＝新羅)国境<sub>一</sub>、潰<sub>二</sub>破城池<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>奴客<sub>一</sub>為<sub>レ</sub>民」という状況になったために、窮地におちいった新羅は高句麗に帰順して救援を求めた。そこで広開土王は翌年、五万の兵を新羅に派遣すると倭兵が退却したために、逃げる倭兵を任那加羅(＝金官国)まで追撃する。それに対して任那加羅は高句麗に従拔城を明け渡して降伏したという。また安羅人の戍兵(守備兵)もこの戦闘に関わっていたようであるが、碑文が摩滅していて詳細は不明である。これが一回目の対高句麗戦であるが、このような戦闘経過から、背後に倭と金官・安羅などの加耶南部諸国との

緊密な連携が存在したことがうかがえよう。<sup>49</sup>

また碑文によれば、永樂六年(三九六)に広開土王は自ら兵を率いて百済を討伐し、大きな戦果をあげた。王の軍隊が百済の王都漢城を包囲して攻め立てると、百済王(阿莘王)は降伏し、永く「奴客」となることを誓ったという。ところが九年(三九九)に至り、百済は誓約に違反して倭と「和通」する。ここにいう「和通」とは、倭との講和を意味し、具体的には『三国史記』や『日本書紀』にみえる阿莘王(『日本書紀』は「阿花王」)の王子腆支(同書「直支」)を倭国に入質させたことをさすと考えられる。いづれも碑文とは年代に一年の相違があるが、『三国史記』巻二五百済本紀阿莘王六年(三九七)五月条には、「王与<sub>二</sub>倭国<sub>一</sub>結<sub>レ</sub>好、以<sub>二</sub>太子腆支<sub>一</sub>為<sub>レ</sub>質」とあり、『日本書紀』応神八年(干支二運繰り下げると三九七年)三月条所引「百済記」に「阿花王立无<sub>レ</sub>礼<sub>二</sub>於貴国<sub>一</sub>。……是以、遣<sub>二</sub>王子直支于天朝<sub>一</sub>、以脩<sub>二</sub>先王之好<sub>一</sub>也」とみえるのがそれである。そして碑文の永樂十四年(四〇四)条には「倭不軌侵<sub>二</sub>入帶方界<sub>一</sub>」とあり、そのあとは碑文の摩滅が激しく釈読がむづかしいが、「連船」とか「王躬率<sub>二</sub>□□從平穰<sub>一</sub>」などという文字がみえ、そのあとに「倭寇潰敗、斬殺無数」とある。この年、倭は半島の西海岸ぞいに水軍を北上させ、帶方界にまで侵入したが、平壤あたりから迎撃した広開土王の軍隊と戦って惨敗を喫したということであろう。これが碑文にみえる二回目の高句麗戦である。百済と倭が「和通」したあとのことであり、戦場が「帶方界」であったことなどからみて、この戦闘が百済との同盟関係にもとづくものであることは容易に推察さ



れる。

このように広開土王碑から知られる倭と高句麗との直接対決は、いずれも倭軍の単独行動ではなく、あくまでも百濟―加耶南部諸国―倭国と高句麗―新羅という二つの勢力の角逐のなかで生じたものであった。ところが倭の五王の時代には、このような対立の構図が大きく変わるのである。

(二)

五世紀の前半から後半にかけて、朝鮮半島をめぐる国際関係が大きく転換する最大の要因は、新羅の自立の動きにあった。新羅が高句麗の傘下から離脱していくことによって広開土王代のパワーバランスが崩れ、諸勢力がそれぞれの国益確保のために新たな国際関係をさかんに模索しつつあったのが、ちょうど倭の五王の時代なのである。そのような動きを十分にふまえないかぎり、倭王武の上表文で語られている事柄の史実性を正当に評価することはできないと思われる。

そこでまず、新羅の「脱高句麗化」(後出の井上直樹氏の用語)の動きからみていくことにしたい。新羅がある時期まで高句麗に軍事的に従属していたことは、先にふれた新羅が高句麗に帰順して自国領内に侵入していた倭兵を掃討してもらったということに加えて、四〇〇年前後に実聖や卜好といった王族を高句麗に入質させていること、さらには中原高句麗碑に、新羅領内に高句麗が幢主(軍司令官)を派遣していたことや、高句麗を兄とし新羅を

弟とする高句麗優位の関係が示されていることなどから考えられる。ただし中原高句麗碑は、碑面の摩滅がはなはだしいために内容に不明なところが多く、立碑の時期についても、五世紀初頭説から六世紀初頭説まで諸説があり、時期を定めにくい。

「脱高句麗化」の時期については、従来は六世紀初頭まで降らせて考える見解が有力であった<sup>①</sup>。その後も、糸永佳正氏がそのような見解を継承している<sup>②</sup>。この説の最大の根拠になったのが、『魏書』卷八世宗本紀の景明三年(五〇二)条や永平元年(五〇八)条に來朝してきた国としてあげられている「新羅」を新羅とみなすことで、それを高句麗主導の朝貢と解して、新羅は六世紀初頭まで高句麗の従属下にあったと考えるのである。これに対して『魏書』の二つの記事を詳細に検討した井上直樹氏は、いずれのときも北魏に朝貢した国々に高句麗が見出せないことから高句麗主導の朝貢とは考えられないこと、また『魏略』西戎伝逸文に「新羅」がみえることなどから、『魏書』にみえる「新羅」は西域の国である可能性が非常に高いことを指摘している<sup>③</sup>。したがってこの『魏書』の朝貢記事を根拠に新羅の「脱高句麗化」の時期を六世紀初頭まで下げるとは困難であろう。

実は、新羅の「脱高句麗化」の過程を示す史料は、『三国史記』に少なからず存在する。韓国学界で主流となっているように、それらを基本に考えるのが妥当な方法であろう。『三国史記』卷三新羅本紀第三によれば、奈勿尼師今三十七年(三九二)に実聖が高句麗に入質している。実聖は同四十六年(四〇一)に帰国し、翌年に即位をする。その後、実聖尼師今十一年(四一一)に奈勿

王の子ト好を再び高句麗に入質させるが、訥祇麻立干二年（四一八）に帰国する。『三国遺事』では、実聖については所見がないが、ト好については「宝海」という名で高句麗入質の話がみえる（巻一紀異・奈勿王 金堤上）。ただ『三国史記』とは年代に相違があり、入質が訥祇王三年己未（四一九）、帰国が同十（九カ）年乙丑（四二五）となっている。その後は、新羅が高句麗に質を送ることはなかった。木村誠氏がいうように、この入質外交の終焉が、新羅の「脱高句麗化」の第一歩であろう<sup>54</sup>。

新羅の自立の動きにいち早く反応したのが百済で、毗有王七年（四三三）に新羅に遣使して和を請うと、新羅はすぐさまそれに応じた。さらに翌年には両国が互いに使節を送って聘幣を取り交わすということがあった<sup>55</sup>（『三国史記』卷二百五十百済本紀第三・同書卷三新羅本紀第三）。このような動きは、新羅が公然と高句麗の敵国である百済と講和したことを意味するもので、画期的な出来事といってよい。韓国の学界ではこのような新羅・百済両国の提携を「羅済同盟」とよび、このときから五五四年に両国が管山城で戦い、百済の聖王が戦死するときまで一世紀以上にわたって同盟が継続するとする見方が一般的なようである<sup>56</sup>。これほど長期にわたって「同盟」が継続したかどうかは検討を要しようが、新羅・百済両国の関係が、ある時期に「同盟」とよびうる実質を備えたことは、以下に述べるように、確かに認められる。筆者は、この羅済両国の提携が倭国の対外政策にも少なからぬ影響をおよぼしたのではないかと考える。

さらに両国の関係をたどっていくと、訥祇麻立干三十四年

（四五〇）には、高句麗の辺将が悉直（江原道三陟）で獵をしていたときに、新羅の何瑟羅（江原道江陵）城主三直に襲われて殺害されるという事件が起こった。このときは新羅王の謝罪でことなきをえたが、同三十八年（四五四）に高句麗は新羅の北辺を攻撃する。その翌年、高句麗軍が百済に侵攻すると、新羅は百済に救援軍を派遣する（いずれも『三国史記』卷三新羅本紀第三）。羅済両国が共同で高句麗と戦うのはこのときが最初である。鄭雲龍氏は、このときに羅済同盟が結成されたとみている<sup>57</sup>。しかしながら「同盟」というからには、そのような共同の軍事行動がある程度の期間継続しなければならないであろうが、まだそのような段階には至っていないと思われる。その後、慈悲麻立干十一年（四六八）、高句麗と靺鞨が新羅に侵攻すると（『三国史記』卷三新羅本紀第三）、翌蓋鹵王十五年（四六九）、百済は高句麗の南辺を攻撃する（『三国史記』卷二百五十百済本紀第三）。ただ、これが両国の共同作戦であったかどうかは、判断がむずかしい。

一方で、新羅が高句麗への軍事的従属からなかなか完全に脱却できなかったことを示唆する史料も残されている。『日本書紀』雄略八年（『日本書紀』の紀年で四六四年）二月条には、新羅の派兵要請に応じて派遣された高句麗兵一〇〇人が新羅の王都を守備していたとき、高句麗の新羅侵攻計画が露見したので新羅王が国内の高句麗人を皆殺しにさせたという話が見える。これを重視して五世紀後半まで高句麗への軍事的従属が続いていたとみる説もあるが、全体として説話的な内容であるし、結局は高句麗と対立する話になっているので、高句麗への従属のみを示すものでは

ない。また先にふれたように、中原高句麗碑には、新羅の高句麗に対する従属関係を示唆する内容がみられるが、立碑の時期が不明確で、新羅の「脱高句麗化」の時期を見極める史料にはなりにくいと思われる。

そして、蓋鹵王二十一年（四七五）には、高句麗軍によって百済の王都漢城が攻め落とされ、百済がいったん滅亡するという大事件が起こる。このとき、生き残りの王族・貴族が南に逃れ、熊津（忠清南道公州）を新たな王都として百済は復興されるのである。この出来事は、羅濟関係にも大きな影響をおよぼした。

百済の熊津遷都直後にあたる五世紀第4四半期は、史上、百済と新羅の関係がもつとも緊密になる時期である。炤知麻立干三年（四八一）に高句麗が靺鞨とともに新羅の北辺を攻撃したときには、新羅軍とともに百済と加耶（大加耶か）の援兵が防戦して撃退しているし、同六年に高句麗が新羅北辺へ攻撃をしかけたときにも、新羅・百済両軍が母山城付近で共同して高句麗軍と戦い、これを撃破している。また、同十六年（四九四）には新羅の將軍実竹が高句麗戦で苦戦し、包囲されると、百済の東城王は三〇〇〇の救援軍を派遣して新羅軍を救出する。さらに翌年、百済の山城が高句麗軍に包囲されたときには、百済が新羅に救援を要請し、それに応じた新羅の炤知王は將軍徳智を派遣して高句麗軍を撃退し、百済を救ったという。しかもこの間の東城王十五年（四九三）には、百済の東城王が新羅から伊滄比智の娘を妻として迎え、羅濟間に「婚姻同盟」が結成されるのである（以上、『三國史記』卷三新羅伝第三、同卷二六百済伝第四）。このように

四八〇～四九〇年代は、羅濟両国間の提携がもつとも強化された時期である。この時期の新羅・百済両国の関係は、確かに「同盟」とよぶにふさわしい内実を備えたものになるのである。時期的にみて、それが四七五年の漢城陥落の影響によるものであることは間違いないであろう。すなわち漢城陥落を目的にした羅濟両国は、これまでの提携関係の不十分さを痛感し、両国関係を軍事同盟にまで高め、共同作戦をとって高句麗軍に立ち向かう戦略をとるようになったと考えられるのである。とすれば、倭王武が上表文を宋の順帝に奉呈したのは、まさに羅濟両国が軍事同盟の結成に向けて急速に関係を強化しようとしていた時期にあたっていうことになろう。

その後、六世紀の法興王（五一四―五四〇）・真興王（五四〇―五七六）代に新羅の国力は飛躍的に伸展する。そのなかで羅濟両国はともに南下政策を推進していくが、しだいに加耶の領有をめぐって利害が対立し、両国の立場は急速に背反するようになっていくのである。<sup>38)</sup>

要するに、羅濟両国の接近、同盟は、五世紀に特有の歴史事象といつてよく、それは周辺の高句麗や倭国の外交政策にも少なからぬ影響を及ぼしたであろう。それによって、倭の五王の時期の東アジア世界には、前後の時期とは異なる国際関係が形成されたのではないかと考えられるのである。そこでつぎに、この点に注意しながら、五世紀の高句麗の外交政策をたどってみたい。

## (三)

広開土王代の高句麗は南下政策を重要な戦略としており、百済と軍事衝突をくり返していたが、他方で西方の遼東方面で国境を接する後燕ともしのぎを削っていた。ところが五世紀に入ると後燕が滅亡し、代って建国された北燕の天王に擁立された高雲が高句麗人であったこともあって、北燕との関係は良好となり、しばらくの間、西方戦線は安定する<sup>59)</sup>。そこで広開土王の後を継いだ長寿王は南下政策をいっそう本格化させていった。長寿王十五年(四二七)の平壤遷都はそのような戦略の端的な表れであり、百済領への領土拡大策は長寿王代(四一三―四九一年)の最重要戦略であった。

長寿王は南北両朝の対立を巧みに利用した両属外交を展開するが、そのあり方は時期によって大きく異なる。長寿王が最初に宋へ遣使する景平元年(四二三)から、宋が滅亡する昇明三年(四七九)までに朝貢は二〇回を数え、二―三年に一回のペースで遣使を続けた。一方、同じ時期の北魏への朝貢はそれを上回り、総計二五回に達する<sup>60)</sup>。ただし北魏への遣使は時期的な片寄りが顕著で、太延元年(四三五)にはじめて北魏に朝貢した後、同五年までは連年のように使節を送っているが、その後和平三年(四六二)に朝貢を再開するまで通交が途絶える。これは太延二年(四三六)に北燕の天王馮弘が高句麗へ亡命したことで、一時、両国関係が悪化するためである<sup>61)</sup>。ところが和平三年の遣使後は、両国関係は一転して良好となり、宋が滅亡する四七八年までの

一八年間でみると二―一回もの遣使を行っている。

このように高句麗の対北魏政策は、四六二年以降大きく転換する。その原因は、井上直樹氏のいうように、新羅が「脱高句麗化」をすすめ、百済と提携して高句麗に対抗するようになったことが原因とみてよいであろう。すなわち北魏との友好関係を維持することによって「後顧の憂い」を断ち、共同歩調をとるようになった羅済両国に対抗する政策に転じたと考えられるのである<sup>62)</sup>。

なお高句麗は、この時期、漠北の柔然(蠕蠕)とも通じていたとみられる。大明七年(四六三)の宋の孝武帝の詔では、高句麗が「沙表」(砂漠の国)柔然)に通じ、宋の戦略(北魏包囲網の形成)をよく伝えているとして官爵を授与している(『宋書』卷九七夷蛮・高句麗伝)。一方、百済が延興二年(四七二)に北魏の孝文帝に提出した上表文にも「高麗不義、逆詐非<sup>1)</sup>。……或南通<sup>2)</sup>劉氏、或北約<sup>3)</sup>蠕蠕、共相唇齒、謀<sup>4)</sup>陵王略<sup>5)</sup>」(『魏書』卷一〇〇百済伝)とあり、高句麗は南の宋ばかりでなく、北の蠕蠕(柔然)ともに通じて謀略をたくらんでいると訴えている。さらに太和三年(四七九)に、高句麗が蠕蠕と共謀して地豆于(中国吉林省方面の遊牧民)を侵略して分割しようとした(『魏書』卷一〇〇契丹伝)という所伝もある。いずれもやや具体性に欠ける内容とはいえ、複数の史料が符節を合わせたように高句麗と柔然との通交・共謀を伝えることは無視しがたいことであり、事実を反映しているとみてよいであろう。

倭の五王をめぐる国際関係において、「東部ユーラシア」の立場からもっとも注目されるのは、この高句麗と漠北の遊牧国家柔

然との通交ではなからうか。高句麗は、対宋外交において柔然との通交を自国の評価を高める材料として使い、百済は北魏に対して、逆に高句麗と柔然との通交を暴露することで高句麗の背信行為をアピールし、自己の立場を正当化しようとしたのである。これらのことは、中国を中心とする国際社会のなかで高句麗と柔然との通交が一定の重要性をもっていたことを物語っている。ただし、それを過度に重視することは禁物であろう。中国王朝が高句麗と柔然との通交を知った後も、北魏・高句麗関係や宋・高句麗関係に目にも見える変化を確認することは困難だからである。ましてや高句麗と柔然の通交の倭国への影響如何という問題は、改めて論ずるまでもないであろう。

高句麗が南下政策を最優先させるようになったことで、百済は高句麗の軍事的圧力をいっそうつよく受けるようになっていく。そのことを端的に物語るのが、延興二年に百済王余慶（蓋鹵王）が北魏の孝文帝に提出した上表文である。百済はそれまで南朝宋へは頻繁に遣使していたが、北魏へ通交したことはなかった。それがこのとき突如として北魏に朝貢して高句麗の不義と百済の窮状を訴え、救援軍の派遣を懇願するのである。そのときの上表文には、「自馮氏數終、餘燼奔竄<sup>①</sup>、醜類漸盛、遂見陵逼<sup>②</sup>、構怨連禍、三十餘載、財殫力竭、軫自辱蹴<sup>③</sup>」（『魏書』卷一〇〇百濟伝）とあり、高句麗へ亡命した馮弘が殺害された四三八年以降、「醜類」すなわち高句麗が強勢となつて百済を侵略し続け、三〇余年にわたつて戦禍が続いたため、百済は財・力ともにつき、すっかり衰退してしまつたと訴えている。このわずか三年後には王都

漢城が高句麗に攻め落とされることになるので、上表文はこのときの百済の窮状を吐露したものとみてよいであろう。このように、百済は四四〇年前後から連年のように高句麗の猛攻を受け、しだいに窮地に追い込まれていったと考えられる。

高句麗と良好な関係を保っていた北魏が、百済の突然の救援要請に応じるはずもなく、この遣使はあえなく失敗に終わる。さきに見たように、羅済両国が講和、交聘したのが、四三三・四年のことで、四五五年には羅済両軍がはじめて共同して高句麗軍と戦うことがあった。しかし両国の提携は、この時期にはまだ十分に効果をあげていなかったと考えられる。というのは、右にみたように、五世紀半ばには高句麗が攻勢を強めていたにもかかわらず、羅済両軍が共同して戦うことはまだ少なかったとみられるし、この時期、百済は倭国にも質を送つて修好を求めてくるからである。そこでつぎに、倭の五王の時代の倭・百済関係をたどつてみることにしたい。

#### (四)

『日本書紀』雄略五年（四六一）条には、百済蓋鹵王の弟軍君（昆支）の倭国への入質の話がみえる。百済からの入質は、先述の腆支（直支）を四〇五年に本国に送還して以来、五〇数年ぶりのことである。『日本書紀』同年七月条所引の『百済新撰』には、「辛丑年、蓋鹵王遣弟昆支君、向大倭、侍天王。以脩先王之好也」とある。この時期、百済は新羅との連携を強めてい

たが、既述のように、いまだ軍事同盟といえるほど強固な関係を築くにはいたっていなかった。そこでこのころ軍事攻勢を強めた高句麗に対抗するために、倭国との提携も強化しようとし、その保証として王弟を入質させたのではないかと考えられるのである。

ここで気になるのが昆支の派遣目的を「脩<sub>二</sub>先王之好<sub>一</sub>」といっていることである。さきにふれた応神八年紀（一二〇年くり下げると三九七年）所引『百濟記』の王子直支の倭国への入質記事にも同じ表現がみられるが、この直支の入質はいったん高句麗に帰服した百濟が再び倭と講和することを目的としたものであった。したがって「脩<sub>二</sub>先王之好<sub>一</sub>」とは、疎遠になった兩國関係を「先王」の時代の友好関係に復するという意味に解される。とすれば、四六一年の昆支入質以前、倭国と百濟の関係は、いったん疎遠になつていたことにならう。

じつはそれを裏づけるように、四三〇～四五〇年代の倭・百濟間の通交を示す史料はほとんど残されていないのである。『日本書紀』の神功・応神紀の『百濟記』にもとづいたと思われる記事が干支二運、すなわち一二〇年遡らせる操作を行っていることは著名な事実であるので、年代の修正を行ってみると、応神三十九年（一二〇年くり下げると四二八年）二月条の百濟直支王の妹新<sub>せ</sub>齊<sub>せ</sub>都<sub>と</sub>媛<sub>わ</sub>が来倭した記事（直支王は毗有王の誤りか）から、雄略五年（四六一）の王弟軍君（昆支）の入質記事まで三〇余年にわたって兩國の通交記事はみえなくなる。『三国史記』でも毗有王二年（四二八）の倭国使来訪の記事を最後に倭国との通交記事はとど

え、以後七世紀までまったくみられない。こちらは、直接的には『三国史記』編纂時における史料の残存のしかたに規定されたものと考えられるが、『日本書紀』も同じ四二八年を最後に三〇年ほど通交記事がとどえるのは、筆者には単なる偶然とは思えない。

倭国と百濟は、基本的には友好関係にあったことは確かであるが、通説はそれをあまりに固定的に考えすぎているのではないかと思う。独立国である倭・百濟兩國の国益がつねに一致することはないはずである。広開土王代には新羅が高句麗の従属下にあったので、百濟は高句麗と対抗するために倭国との提携が唯一の選択枝であった。ところがその後、新羅が「脱高句麗化」を進めると、状況は大きく変わる。百濟はすぐさま新羅に接近策をとり、提携の道を探りはじめるのである。この段階で百濟の同盟相手の候補は倭国のみでなくなり、新羅も加わることになる。倭国とは海で隔てられているのに対して、新羅はすぐ東隣の国である。同盟相手としてどちらが戦略的に有利かは明らかであろう。羅濟兩國が実際に講和を結ぶのは四三三年のことであるが、その少しまえから『日本書紀』にも『三国史記』にも倭・百濟兩國の通交記事がなくなるのである。そして四六一年に「脩<sub>二</sub>先王之好<sub>一</sub>」ために昆支を倭に入質させるとあるので、筆者はこの間の三〇年ほどの倭・百濟関係は疎遠になつていたと考える。

高句麗の南下に苦しんでいた百濟は昆支の入質によって倭国との関係を修復し、さらには広開土王代のように救援軍の派遣も要請したのではないかと思われるが、それでは入質によって兩國関係は再び強化されたのかというと、関係は一応修復されたであ

うが、倭国が救援軍の派遣まで踏み込むことはなかったとみてよい。その理由の第一は、前節で検討したように、倭王武が遣使した四七八年まで、倭の五王が高句麗と戦った形跡がないことである。さらに第二に、四七二年に百済は北魏に救援要請をするが、これは百済がさらに苦境に追い込まれたことを物語るとみられるから、このころは倭国との提携ばかりでなく新羅との連携もうまくいっていなかったのではないかと思われる。

このようにみえてくると、倭国は、高句麗の南下政策によって苦境に立った百済から質を送られて救援を要請されたにもかかわらず、救援軍を送って高句麗と対決することはしなかったと考えられないであろう。倭の五王の時代、倭王武の上表文で「高句麗征討計画」を力説していることは裏腹に、倭国は明らかに百済の軍事援助に消極的になっているのである。

### (五)

ここで、倭の五王の官爵にも「都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事」などと登場してくる加耶諸国、栄山江流域勢力（馬韓）と倭国との関係についてみておきたい。五世紀の倭国と加耶および栄山江流域との関係に関わる文献史料はきわめてに乏しいが、周知のように半島各地からこの時期の倭系遺物が出土し、列島各地からは逆に加耶地域や栄山江流域に関係する遺物が出土する。そのような考古遺物からこの時代の両地域の交流の研究が進められている<sup>(64)</sup>。

高久健二氏によれば、半島の倭系遺物は、三世紀後半～五世紀前葉は洛東江下流の加耶南東部から集中的に出土するが、土師器系土器の出土状況からみると、倭人はこの時期に断続的に渡来して、比較的短期間、加耶の海岸部に定住しては帰って行くということをくり返していたとみられ、それは鉄などの交易を目的としていたのではないかとされる。五世紀後半になると、倭系遺物はさらに栄山江流域や内陸部の大加耶（慶尚北道高靈）方面へも分布域を広げるとい<sup>(65)</sup>。このうち大加耶に関しては、朴天秀氏は倭の交渉相手が金官加耶から大伽耶へと変化したことを示すとして重要視しているが、高久氏は出土状況の分析などから、大加耶などの内陸部へは加耶内部で再分配された可能性を指摘している。文献的には、倭国と大加耶はおおむね疎遠な関係にあったとみられるので、筆者は高久氏の見解を支持したい<sup>(67)</sup>。

一方、酒井清治氏の集成によって、半島における須恵器および須恵器系土器の出土状況はほかの倭系遺物とかなり異なる様相を示すことが判明してきた。倭の五王の時代までに相当するとみられるTK二三形式以前にかぎってみると、須恵器系土器の出土地はほとんどが半島の南西部（全羅南北道、以下西部という）と南東部（慶尚南道、以下東部という）に集中するが、両地域では時期的な変遷も出土状況も大きく異なる。すなわち、分布の中心は一貫して西部にあり、最も古いTK七三形式（五世紀前半）が出土したのも西部である。TK二三形式（五世紀後半）になると西部では出土点数が急増して二八点に達し、東部でも出現するが二点にとどまるという。また出土のピークは、西部ではTK二三

TK四七（五世紀末葉）なのに対して、東部では遅れてTK四七（MT一五（六世紀前半））にかけてとされる。しかも東部が墳墓遺跡が主体であるのに対して、西部は墳墓に加えて住居跡や溝跡などの生活関連遺構からの出土が少なくないのである。また列島内の初期須恵器の系譜でも、当初は加耶系であったが、TK七三（TK二一六の時期（五世紀前半））から栄山江流域系に変遷していくとしている。

このように、須恵器に限定してみると倭国との関係が密接なのはほぼ一貫して栄山江流域であったことが知られる。これを倭系遺物全般の動向と対比しながらどのように意義づけるかは、五世紀末以降の栄山江流域における前方後円墳建造の問題とも関連して興味深い。門外漢の筆者の能力を超えた問題であるので、ここでは簡単に全体を概観しておくにとどめたい。

倭系遺物の出土状況からみると、この時期の列島と半島の交流は、五世紀初頭までは加耶南東部の金官国の地域に比較的限定されていたが、五世紀前半ごろから栄山江流域の影響がみられるようになり、五世紀半ば以降は加耶南部全域から栄山江流域へと交流圏が拡大していくとみられる。

考古資料、なかでも土器は生活文化レベルの交流が大きく反映されると考えられるので、このような考古学的事実は、直接的には生活文化、およびそれと関連した交易などの経済活動の分野での列島と半島の交流を示すものと理解される。しかしながら、いくつかの点から倭王権は加耶および栄山江流域との交流を政治的にも重要視していたとみられる。それは第一に、倭の五王が宋に

要求し、授与された官爵のなかに「任那」（金官国の別名）や「慕韓」（＝馬韓、栄山江流域勢力を指すとみられる）という名称が含まれているし、第二に五三二年の金官国の新羅への併合に際しては、倭国は安羅に近江毛野を派遣したり、「任那日本府」を置いたりして必死に金官国の再興を画策する。さらにはそれが失敗に終わったあとも、金官国を構成する四邑の調を「任那の調」と称して、新羅に献上させることにこだわり続けるのである。このようなことからみて、倭王権にとって金官国をはじめとする加耶南部諸国や栄山江流域の勢力との関係が政治的にも重要な意味をもっていたことがうかがわれよう。

以上、五世紀の朝鮮半島と倭国をめぐる東アジア情勢をみてきた。最後に、広開土王代の半島をめぐる国際関係との違いをまとめておきたい。

四世紀末から五世紀初頭にかけての半島をめぐる国際関係は高句麗―新羅と百済―加耶南部諸国―倭国という二大陣営の対抗関係を基軸に展開していた。ところが、五世紀の四二〇年代に入ると、新羅の「脱高句麗化」の動きがはじまることで、このような国際関係が大きく変動しはじめる。まず羅済両国は四三〇年代に講和・交聘し、しだいに軍事提携を強めていくが、五世紀半ばごろはまだ「同盟」といえるほど強固で継続的なものではなかった。

これに対して高句麗は五世紀に入ると、四二七年には平壤に遷都するなど、南下政策をいっそう強める。とくに北燕滅亡後の四四〇年代以降は、連年のように百済への侵攻をくり返した。さ



らに馮弘の亡命をめぐって一時関係が悪化していた北魏とも四六二年以降は関係を修復し、ますます半島南部への攻勢を強めていくのである。

こうして広開土王代の国際関係が急速に変化していくなかで、四二〇年代以降、しだいに倭国と百済の関係は疎遠になっていったとみられる。とはいえ、倭国と朝鮮半島との交流は依然として活発であった。この時期、倭国は金官・安羅などの加耶南部諸国に加えて、栄山江流域勢力との関係を深めていく。とくに倭の五王の時代で注目されるのは、急速に栄山江流域との交流が盛んになっていったことである。これには軍事的な提携関係が含まれていた可能性は考えられるが、交易などの経済的な交流を主体としたものであったとみてよい。倭の五王が叙爵を求めた官爵に任那・慕韓など加耶・栄山江流域に関係の深い地域名を含んでいることには、右のような歴史的背景があったとみられるのである。

強まる高句麗の軍事的圧力によって苦境に立った百済は、四六一年に王弟の昆支を質として倭国に送ってきた。これは、四三〇年代以降疎遠となっていた両国の関係を修復し、軍事援助を得ようとしたのではないかと考えられる。それにもかかわらず倭国は百済の軍事援助には消極的で、ついに四七五年の漢城陥落をむかえることになるのである。

### むすびにかえて―倭の五王の遣使目的―

最後に本稿での検討をふまえて、改めて倭の五王の南朝宋への

遣使目的と倭の五王外交の帰結について考えてみたい。

二節で指摘したように、倭の五王が遣使して冊封を受けたのは南朝宋の四二一―四七八年の間であった。これは、新羅が「脱高句麗化」の道を歩みはじめ、さらに倭・百済関係が疎遠になっていった時期と、かなりの程度重なることに気がつく。

倭王が倭国のみならず百済・新羅・任那・秦韓・慕韓などの都督諸軍事号の除正を要請したことがわかる最初が、元嘉十五年（四三八）の倭王珍の遣使である。倭王讚が永初二年（四二一）に遣使したときも授爵されているが、どのような官爵を自称し、除正されたかは不明である。かりに珍のときから半島南部の国家・地域を含む都督諸軍事号の除正を要請するようになったとすれば、それはちょうど百済との通交記事がとだえる時期（四二八―四六一年）に相当する。讚のときからだとしても基本的には同じようにみてよいと思われる。すなわち倭の五王の遣使と、あの特異な都督諸軍事号の除正要請は、基本的に百済との緊密な関係が変化する時期にあたっているのである。筆者は朝鮮半島南部の諸地域を含む都督諸軍事号を要求するようになる原因として、このような事実注目する必要があるのではないかと考える。

すなわち、広開土王代にあった百済―加耶南部諸国―倭国 vs. 高句麗―新羅という二大陣営の対立軸が、新羅の「脱高句麗化」の動きによってくずれだし、新たに新羅―百済の提携関係が形作られていくのが五世紀の朝鮮半島をめぐる国際関係の最大のポイントといつてよいであろう。そのなかで主要な対立軸は高句麗 vs. 新羅―百済に移っていったことも、本稿での検討から明らかになっ

たと考える。

このような国際情勢のなかで、倭国がどのような外交政策をとったかを考えてみると、一つは加耶諸国・栄山江流域勢力との関係強化であり、もう一つが反高句麗勢力のなかでの倭国の主導権の回復である。既述のように、倭国は広開土王代の四〇〇年前後に百済から太子腆支（直支）の入質を受けたが、それに相前後して新羅からも王子未斯欣（『三国史記』の表記。『三国遺事』では「美海」、『日本書紀』では「微叱己知」）が質として送られてきたことが、彼我の複数の文献に記されている。すなわちこの時期、倭国は高句麗と対決していた百済ばかりでなく、新羅からも質を受け入れたことがあり、半島をめぐる国際社会のなかで高句麗にも対置しうる、主導的な立場にあったことがうかがわれる。

このような倭国の地位は、本稿でみたように、五世紀に入ると大きく転換する。半島を舞台とした武力抗争が激しさを増す一方で、倭国は、新たに形成されつつあった高句麗 vs. 新羅―百済という対抗軸から疎外され、朝鮮諸国への影響力は急速に低下していったとみられるのである。筆者は、倭の五王の遣使がはじまったのは、このような状況下のことであったと考える。

そこで倭王珍らのとった戦略が、反高句麗勢力の盟主を標榜することによってそれに見合った官爵を獲得し、影響力を強めつつあった加耶諸国や栄山江流域勢力ばかりでなく、高句麗との武力抗争の当事者となっていた百済・新羅両国に対しても主導的地位を回復しようとするものであったのではなからうか。こう考えると、倭国がなぜ執拗に「都督百済諸軍事」号を要求し続けたのかがよく

理解できよう。新羅との提携関係を強めつつあった百済に対して影響力を強めるためには、どうしてもすでに百済王を「都督百済諸軍事」に除正している宋朝から同じ称号を獲得する必要がある<sup>(19)</sup>と考えたのであろう。

そうであるとする、四六一年に百済の蓋鹵王が「脩先王之好」ために昆支を倭に質として送ってきたことは、倭国にとつて百済への影響力を回復する千載一遇の好機であったにちがいない。それにもかかわらず、倭国は百済の軍事援助に乗り出さなかったのである。これをどう考えたらよいであろうか。

筆者は、広開土王碑にみえる倭国軍の二度の敗戦は、その後の百済と倭国の外交政策に大きな影響を及ぼしたのではないかと考える。百済が、その後新羅との提携の道を歩むようになるのは、この敗戦によって「倭軍、頼みとするに足らず」という認識をもつようになり、それがほかに同盟国を求める重要な契機となったのではないかと想像する。一方、倭国は二度の敗戦によって高句麗軍の強さを思い知らされ、以後、高句麗との軍事衝突を回避するようになったという仮説を立てると、以後の倭国をめぐる国際関係の推移がよく説明できるのである。

筆者は、倭の五王の外交政策は大きな矛盾をかかえていたと考える。それは、反高句麗勢力の盟主を標榜することによって高句麗並みの官爵を宋朝に要求しながら、高句麗との武力衝突は回避するという矛盾である。軍事力によって正面から高句麗と対抗することがむずかしいことを悟った倭国は、高句麗並みの官爵を獲得することで反高句麗勢力の盟主たることを百済・新羅に認めさせ

せ、広開土王代のような主導的地位を回復しようとしたのではないかと考える。倭の五王がこぞって官爵の除正を遣使の最大の目的としたのは、このような外交方針をとっていたからであろう。

四七七年の倭王武の遣使も、基本的には右の路線の延長にあったと考えてよいと思われるが、漢城陥落後の新たな情勢への対応という側面もあったと考えられる。新たな情勢とは、高句麗の軍事的脅威を痛感した新羅・百濟両国がさらに軍事提携を強め、四八〇年代初頭には軍事同盟の結成にいたることである。このような両国の動きを察知した倭王武は、父王済以来、「高句麗征討計画」を悲願としていたことを強調して倭国が反高句麗勢力の盟主たることを主張して、「開府儀同三司」と「都督百濟諸軍事」を含むこれまで以上の官爵の除正を求めるのである。百濟を上回る官爵を獲得することで、羅濟両国の急速な接近の動きに割って入り、倭国の主導的立場を復活させようとしたのではなからうか。しかしそのもくろみはあえなく失敗に終わるのである。

漢城陥落後の国際情勢をどう理解したらよいかは、『日本書紀』と『三国史記』の所伝が大きく乖離していて、きわめてむずかしい。『日本書紀』雄略二十三年（四七九）四月条には、百濟の文斤王（『三国史記』の三斤王のことか）が薨じたので、天皇は昆支の第二子末多王を内裏に連れて来てながら訓戒を授けて百濟王に冊立し、筑紫の軍十五〇〇人を付けて本国まで衛送し、これが東城王となったという話を載せる。このように『日本書紀』は、倭王権が南遷後の百濟の再興に深く関与したことを強調している。二十三年条はかなり記事が具体的なので、基本的に事実とみ

なすのが通説であるが、『三国史記』によれば昆支は四七七年以前に百濟に帰国していることが明らかなので、『日本書紀』がその後も末多王らが倭国にとどまっていたとすることを疑問視する意見もある<sup>1)</sup>。

また、もし東城王が雄略天皇に冊立されたのが事実だとすれば、そのあと百濟に対する倭王権の影響力は増大するのが自然であるが、事実はまったく異なっていた。すなわち、さきにもたように、東城王代は羅濟関係が「同盟」とよぶのにふさわしい内実をもつようになった時期であり、両国軍は再三にわたって共同で高句麗軍と戦い、撃退している。つまり倭国に長期滞在したとされる東城王は、倭国に救援要請はいつさいおこなわずに、新羅との同盟関係を強化して高句麗の南下政策に対抗する路線をひた走るのである。このような、一見相反する事実を伝える『三国史記』と『日本書紀』の描く漢城陥落後の倭・百濟関係をどのようにして整合的に理解するかが今後に残された課題である。

注

- (1) 田中俊明「韓国の前方後円形古墳の被葬者・造墓集団に対する私見」（朝鮮鮮学会編『前方後円墳と古代日朝関係』同成社、二〇〇二年）。
- (2) 拙著『大王から天皇へ』（日本の歴史03巻）（講談社、二〇〇一年）七二～七三頁。
- (3) 坂元義種「倭の五王―空白の五世紀―」（教育社、一九八一年）一六三頁以下。
- (4) 鈴木英夫「倭の五王時代の内外の危機と渡来系集団の進出―高句麗征討計画の意義―」（『古代の倭国と朝鮮諸国』青木書店、一九九六年）。

- (5) 坂元氏、前掲「倭の五王―空白の五世紀―」一七九頁以下。
- (6) 石井正敏「5世紀の日韓関係―倭の五王と高句麗・百濟―」『日韓歴史共同研究委員会報告書 第一期 第一分科〈古代〉』（二〇〇五年）。
- (7) 坂元義種「倭の五王の尊号問題―武の自称称号を中心に―」（『ゼミナール日本古代史下』光文社、一九八〇年）。
- (8) 代表的なものとして廣瀬憲雄「古代日本外交史―東部ユーラシアの視点から読み直す―」（講談社選書メチエ）（講談社、二〇一四年）があげられる。吉川真司「飛鳥の都 シリーズ日本古代史③」（岩波新書）（岩波書店、二〇一一年）もまた「ユーラシア東部」という枠組みで七世紀の倭国をめぐる国際関係を叙述している。
- (9) 上表文の文体の特徴については、福井佳夫「倭国王武「遣使上表」について（上・下）」（『中京国文学』第一四、一五号、一九九五・九六年）参照。なお、鈴木英夫「倭王武上表文の基礎的考察」（前掲「古代の倭国と朝鮮諸国」）は古代史学の立場から研究史を丹念に整理しつつ上表文の検討をおこなった労作である。また近年の上表文の研究として、河内春人「倭王武の上表文と文章表記」（『国史学』一八二、二〇〇三年）、田中史生「武の上表文―もうひとつの東アジア―」（『文字と古代日本2 文字による交流』吉川弘文館、二〇〇五年）、川崎晃「倭王武の上表文」（『東アジア世界の成立』（日本の対外関係）吉川弘文館、二〇一〇年）などがある。
- (10) 内田清「百濟・倭の上表文の原典について」（『東アジアの古代文化』八六、一九九六年）。
- (11) 田中氏、前掲「武の上表文」。
- (12) 湯浅幸孫「倭国王武の上表文について」（『史林』六四卷一五号、一九八一年）。
- (13) 河内氏、前掲「倭王武の上表文と文章表記」、川崎氏、前掲「倭王武の上表文」。
- (14) 「融泰」の意味は、湯浅氏、前掲「倭国王武の上表文について」による。
- (15) 「廓土遐畿」の解釈には諸説あるが、ここでは「土（＝領土）を廓き、畿（皇帝の支配のおよぶ境）を遐かにす」と訓んだ。
- (16) 西嶋定生「日本歴史の国際環境」（UP選書）（東京大学出版会、一九八五年）七五頁以下。
- (17) 山尾幸久「日本古代王権形成史論」（岩波書店、一九八三年）三一頁。
- (18) 川崎氏、前掲「倭王武の上表文」。
- (19) 西嶋氏、前掲「日本歴史の国際環境」七四頁。
- (20) 福井氏、前掲「倭国王武「遣使上表」について（上）」。
- (21) 拙著、前掲「大王から天皇へ」七七頁。
- (22) 拙著、「大王から天皇へ 日本歴史03」（講談社学術文庫）（講談社、二〇〇八年）三六〇頁参照。
- (23) 拙著、前掲「大王から天皇へ」七七頁。
- (24) 福井氏、前掲「倭国王武「遣使上表」について（上）」。
- (25) 坂元義種「中国史書対倭関係記事の検討―藤間生大「倭の五王」を通して―」（『古代東アジアの日本と朝鮮』吉川弘文館、一九七八年）四六三頁。
- (26) 福井氏、前掲「倭国王武「遣使上表」について（上）」。
- (27) 廣瀬憲雄「倭の五王の冊封と劉宋遣使―倭王武を中心に―」（鈴木靖民・金子修一編『梁職貢図と東部ユーラシア世界』勉誠出版、二〇一四年）。
- (28) 西嶋氏、前掲「日本歴史の国際環境」七四頁。
- (29) 鈴木氏、前掲「倭王武上表文の基礎的考察」。
- (30) 川崎氏、前掲「倭王武の上表文」。
- (31) 山尾氏、前掲「日本古代王権形成史論」三〇三・三〇四・三二七頁。
- (32) 坂元義種「五世紀の日本と朝鮮―中国南朝の封冊と関連して―」（前掲「古代東アジアの日本と朝鮮」）。
- (33) 鈴木靖民「倭の五王の内政と外交」（林陸朗先生還暦記念会編『日本古代の政治と制度』続群書類従完成会、一九八五年）。
- (34) 坂元義種「倭の五王―その遣使と授爵をめぐって―」（前掲「古代東アジアの日本と朝鮮」）。
- (35) 石井氏、前掲「5世紀の日韓関係―倭の五王と高句麗・百濟―」。
- (36) 田中史生「倭の五王と列島支配」（『岩波講座 日本歴史 原始・古代1』岩

- 波書店、二〇一三年)。
- (37) 氣賀澤保規「倭人がみた隋の風景」(『遣隋使のみた風景―東アジアからの新視点―』八木書店、二〇一二年)。
- (38) 坂元氏、前掲「倭の五王―その遣使と授爵をめぐって―」。なお高句麗についても、『南斉書』東南夷伝高麗国条は建元元年に進号したとあるが、同書巻二・高帝本紀では進号を建元二年四月のこととする。
- (39) 坂元義種「古代東アジアの国際関係」(前掲『古代東アジアの日本と朝鮮』)。
- (40) 鈴木氏、前掲「倭の五王時代の内外の危機と渡来系集団の進出―高句麗征討計画―の意義―」。
- (41) 鈴木氏、前掲「倭王武上表文の基礎的考察」。
- (42) 坂元氏、前掲「倭の五王―その遣使と授爵をめぐって―」。
- (43) 山尾氏、前掲『日本古代王権形成史論』二九六頁。
- (44) 鈴木英夫「倭王武の対宋外交の側面―昇明元年の遣使の倭王をめぐって―」(前掲『古代の倭国と朝鮮諸国』)。
- (45) 廣瀬氏、前掲「倭の五王の冊封と劉宋遣使―倭王武を中心に―」。
- (46) 福井氏、前掲「倭国王武」遣使上表」について(上)」。
- (47) 廣瀬氏、前掲「倭の五王の冊封と劉宋遣使―倭王武を中心に―」。廣瀬氏はこのことからさらに進んで、「冊封は、倭国内の統治を行う上での意味は大きくはな」とし、鈴木靖民氏が提唱した「府官制」(鈴木氏、前掲「倭の五王の内政と外交」)にも全面的な見直しが必要なことを論じている。筆者もこの見解を支持したい。
- (48) 田中俊明「大加耶連盟の興亡と「任那」―加耶琴だけが残った―」(吉川弘文館、一九九二年)一九二頁以下。
- (49) 以下、碑の釈文は武田幸男『廣開土王碑原石拓本集成』(東京大学出版会、一九八八年)によった。
- (50) 田中俊明「高句麗の「任那加羅」侵攻をめぐる問題」(『古代武器研究』二、二〇〇一年)。
- (51) 武田幸男「新羅官位制の成立」(旗田巍先生古稀記念会編『朝鮮歴史論集』上、龍溪書舎、一九七九年)、同氏「五、六世紀東アジア史の一視点―高句麗「中原碑」から新羅「赤城碑」へ―」(『東アジア世界における日本古代史講座4 朝鮮三国と倭国』、学生社、一九八〇年)。
- (52) 糸永佳正「新羅の高句麗からの自立時期について」(大阪教育大学歴史研究室『歴史研究』三六、一九九九年)。
- (53) 井上直樹「高句麗の対北魏外交と朝鮮半島情勢」(『朝鮮史研究会論文集』三八、二〇〇〇年)。
- (54) 木村誠「新羅国家生成期の外交」(『古代朝鮮の国家と社会』吉川弘文館、二〇〇四年、初出は一九九二年)。
- (55) 以下の羅濟関係に関する記述は、木村氏、前掲「新羅国家生成期の外交」、拙稿「五世紀の倭・百濟関係と羅濟同盟」(『アジア文化史研究』七、二〇〇七年、初出は二〇〇六年)など参照。
- (56) 鄭雲龍「羅濟同盟期の新羅と百濟の関係」(『白山學報』四六、一九九六年参照)。
- (57) 鄭氏、前掲「羅濟同盟期の新羅と百濟の関係」。
- (58) 拙稿「金官国の滅亡をめぐる国際関係」(『百濟と倭国』高志書院、二〇〇八年)など参照。
- (59) 武田幸男「長寿王の東アジア認識」(『高句麗史と東アジア』岩波書店、一九八九年)。
- (60) 坂元義種「南北朝諸文献に見える朝鮮三国と倭国」(『東アジア世界における日本古代史講座3 倭国の形成と古文獻』学生社、一九八一年)。
- (61) 井上氏、前掲「高句麗の対北魏外交と朝鮮半島情勢」。
- (62) 井上氏、前掲「高句麗の対北魏外交と朝鮮半島情勢」。
- (63) 岩波古典文学大系本『日本書紀』は、底本(卜部兼右本)の「先」を前田本・宮内庁本によって「兄」に改めているが、ここは底本に従った。それは、さきに引用した『日本書紀』応神八年三月条所引「百濟記」にも「遣王子直支于天朝、以脩先王之好也」と、まったく同じ表現があることと、「兄王」よりも「先王」の方が意味が明確であることによる。

- (64) 「先」と「兄」は字形が類似するので、筆写の際に書き誤ったのであろう。高久健二「韓国の倭系遺物―加耶地域出土の倭系遺物を中心に―」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第一一〇集、二〇〇四年）、朴天秀「加耶と倭―韓半島と日本列島の考古学―」（『講談社選書メチエ三九八』）（講談社、二〇〇七年）、亀田修一「遺跡・遺物にみる倭と東アジア」（『前掲『東アジア世界の成立』）、酒井清治「土器から見た古墳時代の日韓交流」同成社、二〇一三年）など。
- (65) 高久氏、前掲「韓国の倭系遺物―加耶地域出土の倭系遺物を中心に―」。
- (66) 朴氏、前掲「加耶と倭―韓半島と日本列島の考古学―」。
- (67) 田中氏、前掲「大加耶連盟の興亡と「任那」―加耶琴だけが残った―」一五一―二〇四頁など参照。
- (68) 須恵器の年代については『年代のものさし―陶邑の須恵器―』（大阪府立近つ飛鳥博物館、二〇〇六年）を参照した。
- (69) 酒井氏、前掲「土器から見た古墳時代の日韓交流」。
- (70) 既述のように、坂元氏が主張した「一地域二軍権」が成り立たないとすれば、むしろ百済王にとって代わって倭国王が「都督百濟諸軍事」に除正されることをもくろんだと考える方がよいと思われる。
- (71) 田中俊明「百濟文周王系の登場と武寧王」（『有光教一先生白寿記念論叢 高麗美術館研究紀要第5号』（二〇〇六年）